

令和5年度から開始した「広島県立文書館ボランティア」の活動は、令和7年11月10日に活動200回目を迎え、9名のボランティアの皆さんが、毎週月曜日と水曜日に、古文書(有田家文書)の整理と目録作成を行っています。令和8年1月27日・28日には、国立歴史民俗博物館の天野真志先生と、東京大学史料編纂所の山口悟史先生が来館してくださり、「平成30年西日本豪雨」で被災した屏風の下張り文書の剥離作業と、劣化した原爆関係資料への対処と保存などについてご指導いただきました。今回は、その作業の様子を中心に紹介します。

### 屏風の下張り文書の剥離作業 (令和8年1月27日・28日)

#### 被災した屏風について

この屏風は、平成30年西日本豪雨で被災し、呉市のクリーンセンター一くれ(ゴミ処理施設)に廃棄されていたもので、施設の職員の方から連絡をいただき、当館で受入れました。屏風の下張り文書には、文政年間の伊予松山の町の日記なども含まれており、ボランティアのみなさんと一緒に、少しずつ剥離作業と文書の整理を進めていく予定です。

屏風の下張り文書の剥離作業の様子です！



剥離作業前の屏風の表側の状態



剥離する前の状態を撮影します。



下張り文書1点ごとに番号札を糊で貼ります。



下張り文書の状態をスケッチします。



文書の重なり状態も確かめます。



竹べらを使って文書を1点ずつ剥がします。



難しい部分は山口先生の出番です！



下張り文書は何層も重ねて貼ってあり、層によって剥がしにくい部分もあります。みんなで協力しながら作業を進めました。

## 下張り文書の剥離作業に参加して（ボランティアのみなさんの感想）

今回も先生方のご指導、大変勉強になりました。少々体力的に響きました。研修に来られた先生方にもお会いでき、ご縁ができました。今後も近隣の大学等から研修を兼ねてお会いできればと思います。

普段の作業とは異なった雰囲気での作業で、楽しく作業をさせていただいた。

（被災した屏風の受入のきっかけは）入門講座受講経験者からの通知（文書館への情報提供）とのことで、講座の思わぬ効果に驚いた。

下張りの中から持ち主の趣味や日常生活が見え、興味がわいた。（謡本や買い物代金の書付等）

楽しい作業でした。手際良くなったと思います。忘れないうちに取りかかれましたらと思います。

傷みの激しい和書の修復をしていました。少し和紙には慣れていましたが、改めて当時の和紙や糊について感じました。水に湿らせれば剥げる、しかも破れないので、現代の紙と糊だったらどうなんだろうかと、そしてリサイクル、捨てればゴミ、分ければ資源ですが、さすがにレース状のビリビリになった紙は使ってありませんでした。

以前の襖の下張り剥離作業の体験を思い起こしながら、作業を行った。作業の基本手順は同じであるが、資料ごと、また、剥離層ごとに保存状態が大きく異なり、その都度、細心の注意が必要で、体力以上に頭が疲れました。

楽しかったです。

棧の濡れた部分の下張り剥がしに熱中して、腰が痛くなりました。

## 劣化した原爆関係資料の調査と指導

天野先生と山口先生には、当館所蔵の原爆関係資料の劣化状態を調査していただき、ボランティアのみなさんと職員に、劣化した資料への対処や保存方法などについて指導していただきました。



活動 200 回目を迎えた広島県立文書館ボランティアのみなさん

左から渡辺さん・富永さん・下向井さん・宮原さん・諸富さん・小熊さん・久保さん・古田さん・三浦さん